エッセイ

Ⅸ　街歩き　琉球人行列と江戸の町

高津　孝

平成31年3月2日（土）に琉球人行列の辿った江戸の町の現在を見て回った。参加者は、上原兼善・駒走昭二・高津孝・富澤達三・丹羽謙治・橋口亘・渡辺美季（五十音順）。当日は暖かい春の日で風がやや強く、花粉症の者にはきつい日であった。新橋駅前の蒸気機関車が展示されている広場に10：00に集合し、まず向かったのは、行列図中、町方の賑わいを示す『琉球人往来筋賑之図』の3つの橋である。琉球人たちは、江戸に到着した後、芝の薩摩藩邸に逗留し、江戸城登城の際には、芝の薩摩藩邸、増上寺表門前、幸橋、薩摩藩装束屋敷を経て、江戸城大手門から江戸城に入った。我々は、幸橋から、芝の薩摩藩邸まで、逆順をたどることにした。江戸城の外堀の南側部分は、溜池から虎ノ門、御成門を経て、浜御殿（徳川将軍家の別邸。現在、浜離宮恩賜庭園）で東京湾に注ぐ。3つの橋とは、町方の商店が連なる芝口一丁目を北に出た所の新橋（旧称芝口橋）、そこから北西に外堀を遡ったところの土橋、幸橋である（図4）。

【幸橋】徳川将軍の芝増上寺参詣の道筋に当たったため、御成橋門と呼ばれる立派な城門があり、明治35年（1902）まで現存したという。堀の無くなった現在は、JRの「幸橋架道橋」という名称が残るだけである（図1）。高架に2008年設置の橋歴板、高架下の壁に「幸橋架道橋」の看板がある。通りを渡ったみずほ銀行内幸町本部ビル（千代田区内幸町1-1-5）、NTT日比谷ビル（千代田区内幸町1-1）が、江戸時代の外桜田の薩摩藩邸（装束屋敷。琉球人行列はここで衣装替えをしたので装束屋敷という）跡で、明治には鹿鳴館がここに建設された。

【図1】幸橋架道橋橋梁下の掲示板

【土橋】東京高速道路の「土橋入口」として名称が残り、案内板が設置されている（図2）。そばには、「築地警察署　土橋地域安全センター」がある。

【図2】東京高速道路・土橋入口の掲示板

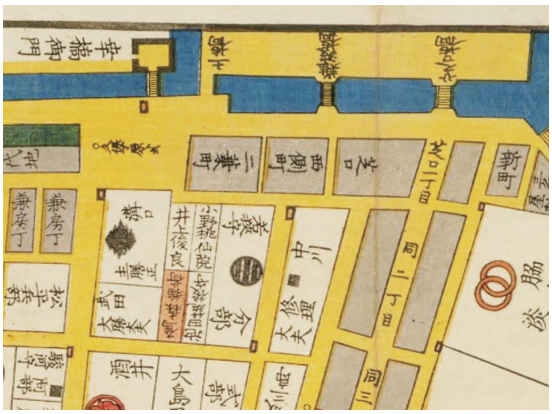
【新橋】銀座御成通の一角に「芝口御門跡」について詳しい解説を付した中央区教育委員会の看板と、当時の絵図を付した石碑が建てられている（図3）。新橋は、宝永七年（1710）に、芝口橋御門という立派な城門が設けられたが、享保9年（1724）に焼失して以降、再建されることなく、名称も新橋に戻ったという。

『琉球人往来筋賑之図』の町屋の賑わいは、日本橋から始まる東海道にあたるが、現在は国道15号（別称、第一京浜）として六車線の広い道路になっている。それを南下して、大江戸線大門駅付近が、琉球使節が通過した増上寺表門前にあたる。表門は現在の大門（旧称、総門）で、明治期に東京都に寄付され、昭和12年（1937）にコンクリート造りに改築された。当日の巡検では、国道15号を浜松町一丁目交差点で西に折れ、地下鉄御成門駅の交差点を南に折れ、日比谷通りを進んで増上寺の三解脱門（図5）（三門、中門、国指定重要文化財）、大殿、徳川将軍家墓所を拝観した。墓所の合祀塔には、島津家から11代将軍徳川家斉の正室に入った広大院が祀られている。

【図3】芝口御門跡の説明板

【増上寺】浄土宗の七大本山の一つ。三縁山広度院増上寺。徳川家康の関東入部以降、徳川家の菩提寺となった。上野の東叡山寛永寺とともに江戸の二大巨刹。慶長8年（1603）から11年（1606）まで、琉球に滞在し、琉球国

王尚寧の命で『琉球神道記』を執筆した袋中上人（1552-1639）は、増上寺の学寮で浄土宗の教学を学んでいる。江戸時代の増上寺の寺域は極めて広大で、東海道（国道15号）を進む琉球使節行列は西側に増上寺の総門を望んだ。（図6参照。浮世絵では、大門、三解脱門、大殿の三つが重なって見える）



【図4】『尾張屋板江戸切絵図』より「愛宕下之図」
国立国会図書館蔵（デジタルコレクション）

【図5】芝増上寺の三解脱門

増上寺から日比谷通りをさらに南に進み、芝公園を過ぎて芝三丁目交差点付近が芝の薩摩藩上屋敷の中心部分にあたる。現在のホテル・ザ・セレスティン東京芝（セレスティン芝三井ビルディング）、三井住友信託銀行芝ビル、芝パークタワーが薩摩藩邸の中心部分にあたるが、全体の五分の一程度に過ぎない。ホテル・ザ・セレスティン東京芝と三井住友信託銀行芝ビルの間の遊歩道には江戸時代の地図と現代の地図をわかりやすく対比した掲示板が設置されている。歴史好きの街歩きには有効である。西郷吉之助（隆盛の孫）書「薩摩屋敷跡」（平成3年1月）の石碑（図7）を見ているところで、歴史的町歩きの先達である江戸文化歴史検定協会の会員の方に出会い、江戸時代の薩摩藩邸と現在の地所の関係、江戸時代の切絵図の見方を教示してもらう。

【図6】歌川広重二代『東海道名所之内　芝増上寺』
国立国会図書館蔵（デジタルコレクション）

【薩摩藩上屋敷】薩摩藩は、正式名称は鹿児島藩。藩主は島津家で、薩摩・大隅および日向国諸県郡の大部分（鹿児島県と宮崎県南西部）を領有、琉球王国（沖縄県）には在番奉行が常駐し間接支配をしていた。石高は、一般に77万石と言われるが、これは籾高で実質35万石である。薩摩藩の江戸後期の屋敷は、藩主の居住する芝屋敷、外桜田の装束屋敷、高輪屋敷等があった。

13：15、遅い昼食をとった後、「ちぃばす」（港区コミュニティバス、100円）で芝三丁目から六本木駅前に移動。歩いて国立新美術館（港区六本木7丁目22-2）へ。国立新美術館とその南側の政策研究大学院大学（GRIPS）が、江戸時代の宇和島藩上屋敷跡にあたる。鹿児島大学附属図書館所蔵『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』の作者は宇和島藩士であり、行列図の末尾に琉球使節とは関係ない宇和島藩邸が描かれるのは、江戸藩邸の様子を宇和島藩の国元の子弟に教えるためである。行列図では、宇和島藩邸は左側の築地が奇妙に歪んでいるが、これは現地が左方向に大きく下り坂になっているためと確認した。巡検の成果である。15：00、解散。

【図7】薩摩屋敷跡　石碑

【宇和島藩邸】宇和島藩は、伊予国宇和島（愛媛県宇和島市）一帯を基盤とした藩。慶長19年（1614）、伊達秀宗が徳川秀忠より伊予宇和島藩10万石を与えられ、翌年に板島丸串城（宇和島城）に入城し、宇和島藩が始まる。秀宗は仙台藩主「独眼龍」伊達政宗の庶長子である。宇和島藩の上屋敷は、麻布龍土（現在の六本木7丁目）にあり、下屋敷は白金にあった。